

教職員情報

連載第10回

京大植物園観察会

第47回観察会のお知らせ

日時:2月22日(木)12:05~12:55

『イヌビワについて』

ガイド:小吹和男さん(日本自然保護協会)

植物園前に集合してください。

第45回京大植物園観察会レポート 2006年12月7日(木)12:05~12:55 曇り

テーマ『ドングリからさぐる-植物の分散戦略-』

ガイド:西田 佐知子(名古屋大学博物館)

植物は自分が動けない代わりに、さまざまなものを使って自分の子孫をよそへ運ぼうとしています。鳥に食べられるために赤や黒のジューシーな実をつけたり、翼のような格好をして風に運ばれやすくしたり、その工夫は驚くほど巧みです。そんな中、丸くてころころしているだけのドングリは、何をしているのでしょうか…。そんな疑問をみんなで考える観察会をしたいと思い、晩秋の植物園に集まっていただきました。

当日は、スタート直前からぽつぽつと冷たい雨が。なんと無情なおてんとうさま…と 思っていたら、その後は雨もほとんど降らずにすみました。それとも、話に夢中になって雨に気づかなかっただけでしょうか？



▲アベマキとクヌギ



▲生り年と普通の実の多さ



▲ドングリを目指して

植物園の奥の林には、アベマキ、コナラ、クヌギ、アラカシ、スダジイ、マテバシイ、シリブカガシなどなど、実に様々なドングリをつける木が生えています。ドングリとはブナ科の木の実を指します。植物園には小さいけれどブナの木もあって感心しました。

実際にお話したことは、ドングリの構造(中身の大部分は双葉(ふたば)であること)やドングリの木の名前の調べ方、そして肝心の、ドングリはどうやってよそへ運ばれるのか、ということなどです。ドングリは、それを食べる動物という、普段は敵とも言える存在によって運ばれ、食べ忘れられたところで発芽したりします。ドングリに生り年(なりどし:豊作の年)と凶作の年があるのは、ドングリに生活を支えられているネズミなどの動物の数を、コントロールする意味があるのではないかとされています(凶作の年に動物の数が減れば、豊作の年のドングリに食べ残りがでるから)。これらの説を、みんなでドングリを探しながら(残念ながら今年は凶作!)考えました。そして、ドングリが凶作の時、熊にドングリをあげようという運動もあるけれど、それについて賛否両論があることなどを話して、森の動物と人との関わりについて参加者の方にも少し考えて貰いました。

今回は私の研究分野とは直接関係のないテーマだったので、突っ込んだ話ができず申し訳なかったですが、私の勉強してきたことに上手に話を補ってくださる方、他の場所でドングリを拾ってきて見せてくださった

方など、いつもながら参加者の方に助けをもらいながら、楽しい観察会だったと自己満足しています。それにしても、植物園の椎の実は大きかったなあ…。

京大植物園を考える会 <http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

[|ひとつまえにもどる|](#)

Copyright (C) SCOOP. NET Kyoto-Univ CO-OP. All Rights Reserved..